

国際理解学習におけるNHK放送番組の効果的活用

一課題設定の視野を広げる小学4年の実践一

石井芳生（関西大学初等部）・黒上晴夫（関西大学）・泰山裕（鳴門教育大学）・遠衛孝成（日本放送協会）

概要：小学4年の総合的な学習の時間において国際理解学習に取り組むとき、主体的・対話的で深い学びを生み出す授業にならない場合がある。その主たる原因は探究課題の設定が難しいことにある。縁遠い異国についての情報が少ないことに加えて、どのような視点で、その国やその国で暮らす人々の気持ちをとらえるかが明確になっていないことが原因ではないかと考えた。そこで、NHK for School「ドスルコスル（国際理解をテーマにした回）」を視聴することで、探究の視野の広がりを目指した。視聴後に実施した質問紙調査やテキストマイニングの結果から、視野の広がりや活動イメージの具体化を確認することができた。

キーワード：国際理解学習、総合的な学習の時間、課題設定、視野の広がり、NHK for School、

1 はじめに

総合的な学習の時間において、放送番組の提供だけでは、個別学習をサポートするのは難しく、教師は子供の学習状況を見ながら不足している部分について助言する力量が求められる（寺嶋ら 2003）。

私立A小学校4年生はカンボジアを対象国として国際理解学習に取り組んでいるが、当該国に暮らす外国人が大切にしている文化や価値観まで包括して概念をもたせることは容易ではない。設定する課題が探究の連続性を生み、獲得した知識が経験などつながって概念化されることが必要である。そこで、総合的な学習の時間のために制作されたNHK for School「ドスルコスル」の国際理解をテーマにした回の視聴を知識のリソースの一つとして単元に組み入れることで、課題設定段階での視野を広げ、活動の見通しをもたせることにした。番組視聴によって探究課題設定の視点がもてたのかを質問紙調査およびテキストマイニングの結果から考察する。

2 研究の方法

(1) 調査対象および調査時期

私立A小学校4年児童59名。2018年7月上旬。

(2) 分析方法

同番組の国際理解をテーマとする番組を視聴後に質問紙調査を実施し、その結果を記述統計とテキストマイニングによる共起ネットワークから分析し

た。質問紙は国際理解に取り組む際の課題設定の視点を問うことを目的とするもので、構成は計5問。5件法の選択問題が2問。選択肢から1から3位までの順位付けしてそれぞれの理由を記述する問題が1問。記述回答の設問が2問。5件法設問は割合を算出し、記述設問はテキストマイニングソフト（KH-Coder）による共起や個々の記述内容から児童の課題設定の視点や思考を分析した。

3 結果

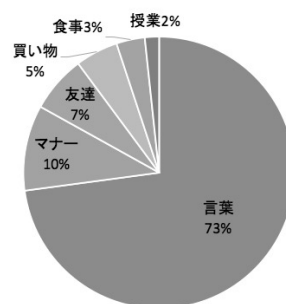


図1 外国人が日本に来て一番難しいと思うこと

「ドスルコスル」の9回目「どうする？外国人のたちとの共生」を視聴するまでは、カンボジアについて調べる対象はアンコールワットや食べ物などを調べている子が殆どで、その多くは本やインターネットに記されている内容を引用するものだった。そこで、番組の内容に準えて、「外国の小学生が日本に住むことになったとき、一番難しいと思うことは何か」という設問を通して、対象国のことを知るとはどういうことなのかを、より具体的にイメージさせることをねらった。図1はその回答結果である。さらに、図2は、その1位から3位までの累計結果である。

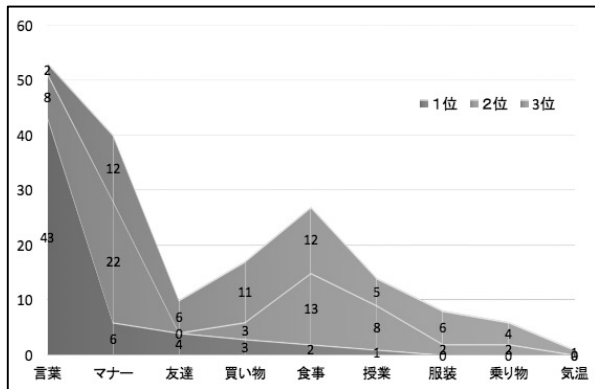


図2 外国人が日本に来て難しいと思うこと

図3は、「番組を視聴して、今後の活動のヒントになったこと」に対する記述回答をKH-Coderで共起ネットワークとして表したものである。子供たちがどのような視点で今後の学習のヒントをつかんだかを個人・全体として見とるねらいである。

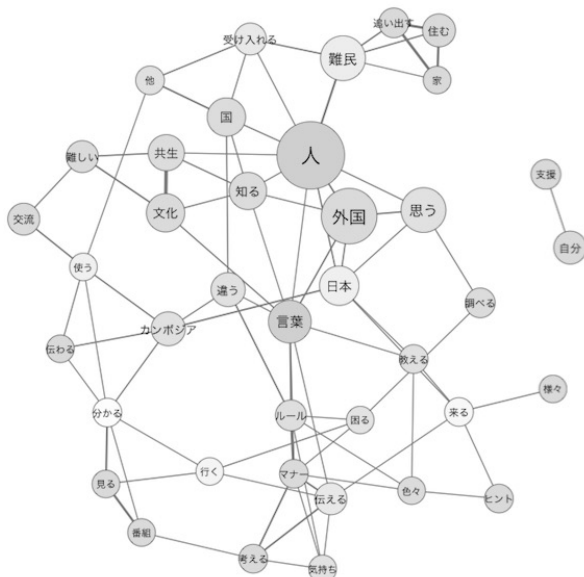


図3 視聴して活動のヒントになったこと (共起)

4 考察

図1の「言葉」(73%)、図2の「言葉」(累計53/59名)という結果は、言葉の壁が外国人の精神的苦痛につながっているという視点を番組から得たことを証明している一例である。なぜなら、視聴前の情報カード(調べたことを書き残すシート)を見ると、カンボジアで「こんにちは」は何と言うのかなどに着目していた子が、「言葉は授業や買い物をストレスなく成立させる重要なものだと感じた」と記述回答しているからである。この児童は、番組に登場する人物が言葉の壁によって心が塞ぎこむ様子か

らそう感じたからだと回答している。また、図3は、番組視聴によって今後の活動の参考になったと思うことの共起ネットワークである。子供たちが参考になったと感じている視点の共起(中心性)は、「人」「言葉」に続いて「難民」「伝える」にあることが明らかになった。いずれも、人、もしくは、人を介してのものばかりである。これは、多くの子供たちが視聴前に調べる対象としていたアンコールワットなど「もの」や「こと」の視点とは異質である。番組内で使われている「難民」という言葉はそのまま知識となり、「難民によって土着民族が追い出されているから、多文化共生は大事だ」という内容で記述回答した子が14名(23.7%)いた。

5 結論

国際理解という同じ領域で総合的な学習の時間に取り組んでいる学校の取組を映像で視聴することで、新たな知識を得たり、課題設定の視点や学習の進め方に気づいたりする効果があることが明らかになった。また、番組内の子供達と自分たちを比較したり、関連づけたりしながら視聴している姿が認められた。ただし、「難民」「多文化共生」という言葉を番組視聴によって初めて知ることによって、思考がそれらに引っ張られる傾向が生じることも否めない。

6 今後の課題

課題設定の視野の広がりや番組視聴のみに求めるのではなく、当該国の人たちの価値観にまで目を向けさせるべく、当該国の人やものに出会う場の設定など、教師による単元・授業設計力も必要である。番組活用に関しては、一斉視聴を経て、一人ひとりとの対話によって、探究価値のある課題設定ができることが最も重要なことと捉える。

参考文献

- 生野金三(2018)「総合的な学習の時間」の研究 開智国際大学紀要 第17巻 pp.95-101
- 水越敏行(1977)放送教育の方法論を求めて 放送教育研究6.7巻 pp.3-22
- 寺嶋浩介・亀井美穂子・久保田賢一(2003)放送教育の役割と学習環境の変化 教育メディア研究 第9巻 No.2 pp.55-59